

小説

明 順

水谷 久美子

これは、わが国の至るところに、まだ戦争の爪痕が残っていた頃のことである。島根県松江市の田舎も例外ではなかった。

美鈴の住む家から小学校までは、山あり谷ありの道のりだった。

朝、近所の子どもたちと誘い合って、すぐに胸突き八丁の苔むした段々坂を息弾ませて登り、鬱蒼と樹の生い茂る山道を長い帯のようになって歩いていく。

農業と林業に従事する家が多く、子どもたちは山と田んぼの手伝いを当たり前にしていた。学校まで一時間の急峻な通学路も何のことはなかった。

校四年生になっていた。

その一年前に明順は地元の小学校に転校してきた。貯水池がまだ建設中の頃、家族と引越して来たのだと聞いていた。工事中の池は危ないからと、子どもたちは行くのを止められていて、人夫が住み込む飯場棟が出来ているのを知ったのは、大分後のことだった。

貯水池の土手には管理棟があり、都会から赴任した夫婦が管理人として住み込んでいた。村の助役をしている美鈴の父と知り合いで、時々遊びに行くのが楽しみだった。

ズーズー弁しか知らない美鈴には、言葉が綺麗で身だしなみの良いおじさんとおばさんが憧れでもあった、必ずお菓子やばた餅など作って持たせてくれるのが嬉しかった。

管理棟から見える土手に屋根だけが見えて、煙が上がつることがある。

「誰が住んじょうなーかね？」

「水が不足すると稲が枯れるからね。貯水池作って田んぼへ平等に水を流す工事する人の宿だよ。今度美鈴ちゃんと同じ年の子が学校に行くから、仲良くしてあげてね」

おばさんにそう言われて、興味津々で近付いたのであ

やがて山が途切れると視界が明るくなり、一帯に田園が広がるのが見えてくる。それぞれの村から延びている山道は、その辺りで一筋の幾分大きな農道にまとまり、学校や駅に続いていた。

そこには大きなコンクリートの橋が架かっていて、農業用水が勢いよく流れていた。水不足を解消するため、隣村の山の中腹に建設された貯水池から田んぼに分水されている。あちこちの山の端から掃き出されるように出て来た子どもたちが、橋に集まると友だち同士がグループになって歩きたず。

明順は毎朝貯水池の土手から下りて来る。美鈴と目が合うとはにかみながら並んで歩いた。明順と美鈴は小学

る。

明順の言葉遣いと雰囲気の違いを感じて、何か中途半端な気持ちが付きまどつていた。

村人の間では、工事現場で働く者とは仲良くしないのがルールとなっているのも不思議だったが、母親があからさまに「あぎゃん所は行くかねで！」と叱るのも腑に落ちなかった。その訳は徐々に知ることになった。

小学校時代はお互いに遊びに夢中な少女だった。建設現場の話は、家族などが噂するのを繋ぎ合わせて知ったことである。

貯水池建設現場では、朝鮮から渡って来た労働者と日本の労働者たちが働いていた。日本各地の工事現場を流れて、急拵えの飯場で共同生活をしていて、二か国の言葉が入り乱れて賑わった。貯水池が完成し飯場が解体された後、三軒の朝鮮の家族だけが粗末な小屋を建てて生活していた。

明順の転入は学校の一大事になり、露骨な視線を向けられることになった。着ている服や学用品が貧相だったからである。美鈴と背丈が同じで、体操や整列ではいつも二人が組になった。

父親はいないと聞かされていた。まだ幼い弟と妹がい

た。母親は日銭稼ぎに、アルマイト缶に入れた煎餅を風呂敷に背負って、村々に売り歩いてた。美鈴が山道で出逢うと、びつくりするほどの大声で挨拶をされた。一軒ごとに寄り道して、煎餅を買っても買わなくても縁側でお茶を出す家人と話し、大きな声で笑う母親はみんなに好かれていた。お菓子や饅頭、要らない服などを差し出すが家の中へ呼び込むことはしなかった。

盆と正月は野菜やお餅を持たせるのが常で、母親は手を合わせてお札を言い、重くなつた風呂敷を背負って帰って行った。

明順も学校が無い時は母親とお金持ちの家の茶摘みの手伝いに出向き、日銭を貰っていた。同級生は「明順がパンツ履いただけでおったけん、おべた（仰天した）がね」とこ馬鹿にして吹聴した。就学前の弟妹は大人しく留守番をしていた。

朝鮮人という言葉聞いたのもその頃である。

明順は好奇の眼で見られるのに慣れたふうで、自ら存在を目立たなくしているように見えた。

二人は背丈が似てお互いに髪を三つ編みにしていたから、姉妹とからかわれることもあった。村はお金持ちが少なく他にも身なりの貧しい子がいたし、美鈴の家も豊

かではなく姉のお下がりを着ていたので、明順だけが変わっているとは思わなかった。

遊びに行くとき家には行かず土手から明順を呼んだ。持って行ったおはじきやカルタで遊んでいると、弟や妹も出てきて夢中になって遊んだ。色とりどりのモールを分けてあげると弟妹は大喜びだった。

三軒の家は、トタンや古材を寄せ集めて建てた小屋のようなものである。だが晴れたある日の光景は美鈴の眼を射った。庭に原色の布団がズラリと干してあった。清潔な真っ白いカバーを掛けて・・・美鈴の家の布団は紺餅が主流で、たまに色の付いた着物柄が被せてあるくらいである。くすんだ布団にカバーも掛けて無く、明順はこんな素敵な布団で寝ているのかと羨ましかった。

小学校は小高い丘の上であり、緩い坂は桜並木になっている。こじんまりした校舎の前の校庭からは見渡す限りの田園地帯が広がって見える。その南には宍道湖があり、手前に一畑電車のレールが一直線に続いている。松江駅から出雲大社へ走る線路だ。

稲の穂が伸びる頃、美鈴と明順はブランコを揺らしながら、稲田が風に波打つのを眺めた。耳を澄ますとさやさやと稲のなる音が聞こえた。

旧盆が終わると農家は総出で実つた稲を刈り取り、木

で他へ行っていたとしか言わず、聞かれるのを拒んでいようである。それ以上は聞けなかった。働き口があったのだろうか。

また土手に行くようになり、暗くなるまで遊んだ。

農作業に励む兄弟夫婦に代わり、美鈴は幼い甥っ子のお守り役もしていた。家の田は町歩が大きく近在から数人の助っ人が通っていて、葉缶に茶を沸かし重箱に詰めた昼ご飯を包み、甥っ子を背負い田んぼへ運んだ。兄嫁がお乳をあげてる間、美鈴も赤飯や煮物を一緒に食べた。

空になった風呂敷包みを下げて家に戻ると、眠った甥っ子を寝かしつけるのに布団をはぐつた。真ん中に大きなムカデがいて素早く逃げるのと、子を抱っこして庭へ飛び出すのが同時だった。恐る恐る部屋に戻り寝かせて次の仕事に急いだ。美鈴は忙しかった。

裏庭の五右衛門風呂を沸かすのも美鈴の仕事だった。天秤棒を担いで畑にある井戸で水を汲み、風呂釜に一杯になるまで往復する。薪を燃やし吹き竹で勢いを付けてひとまず終了である。この吹き竹が、美鈴に一生忘れられない悪夢を植え付けた。

吹き竹の中にムカデがいて顔に上って来たのだ。顔面をひと巡りするまで何か分からず、気付いた時は手で

で組んだハデに干す。男衆がハデの横木に登って待つ手元へ、女衆が束ねた稲を投げ上げる。束を真ん中で分けた稲を手早くハデに引っ掛けていく。足場を徐々に上の段に移し変えながら最上段まで行くと、それは地面から五、六メートルにもなった。

息の合った連携作業も、距離が開くほどに放り損ないと受け損ないが生じる。そのたびに「下手くそが、何やっちゃうだらー」と悪態の応酬がある。夏休みが過ぎるまで、勝手な方向を向いた稲ハデが畦道に立ち並んだ。畳表にする草も作っていて、泥水に浸けては干すのを何度も繰り返し返す。その束を干すのを美鈴も手伝った。身体中ドブネズミのように汚れて最も嫌な仕事だった。

農道の脇に草を並べて干す間、村人は雨が降らないようにと氏神さんにお祈りするのである。農家が忙しい時は家の手伝いで、滅多に明順にも会えなかった。

そんな中、明順が全く姿を見せなくなったことがある。夏休みになると明順の母親は煎餅も売りに来なくなり、一家は行方知れずになった。土手に行くとき三軒ともぬけの殻で、庭には数羽の鶏が所在投げに餌を啄んでいるだけだった。市内へ働きに行つてほしいと話してくれただけだが、家族もあまり詳しいことを知らないようだった。

二期になると明順は学校に来た。訳を聞いたが用事

払っていた。足の甲に落ちたムカデは、強烈な痛みを残して逃げ去った。奥の部屋で甥っ子が泣いていたがやすどころでなく、庭で誰かが帰って来るのをひたすら待った。

やつと母が帰りパンパンに膨れて熱っぽい足に驚いた。「痛いよ」と泣きながら訴えた。兄のトラックで地元病院に行き注射と飲み薬を処方された。その日から一週間学校を休む羽目になった。

鶏は当然として、牛一頭、羊二頭、豚十頭に、納屋には青大将も潜む環境で、大概のことには慣れていたが、毒虫は誰もが怖がっていた。

藁屋根の家には見事なチョコレート色の大きなムカデがいて、天井からポタツと落ちてくることがある。まさか顔にべったりの経験は自分しかないだろう。それから世界で一番の恐怖はムカデになった。

休んでる間は仲良しのえみちゃんが宿題を持って訪ねてきた。数日後古新聞の包みと小さなザラ半紙を届けに来た。

「明順さんがね、こぎやもんあげてだ」と

ホオズキが新聞から現れた。貯水池の辺りに生えているのだろうか、鮮やかな色で甘い匂いがした。紙を広げると鉛筆で拙い字が書いてある。

「ムカデのびょうきかわいそう。早くげんきになってください」

ホオズキを摘んでえみちゃんに託した明順と、それを断らずに持ってきたえみちゃんに胸がほんわかとなった。元氣になって学校に来た美鈴を、明順は今まではなく嬉しそうな顔で迎え、二人はまた友だちになった。

年が過ぎまた翌年も過ぎ田舎の暮らしは繰り返され、

明順と美鈴は六年生になった。

二人の背が伸びて、列の一番後ろに仲良く並ぶようになっていた。

慌しかった農作業が一段落すると、秋祭りの幟が村々の門口に立ち始める。村ごとに氏神さんがあり祭祀の日が決まっていて、九月の初旬から始まって最後の幟が片付けられるまで一カ月かかった。

美鈴の町内の氏神は杵屋（もくや）神社で、親戚縁者を呼ぶ習わしがあり、訪ねる家が多いほどご祝儀を出す苦労がある。美鈴の家は本家で、分家が大勢来ては酔っぱらって収拾が付かなくなることが多く、女たちは仏頂面であった。

魚は日本海の古浦から水揚げしたのを、直接売りに来る浜のおばさんたちから買っていた。鯛があれば刺身と

お澄ましとあら汁のご馳走がある。魚をさばいて刺身にするのをしごすと言ひ、今でも男の仕事だ。紅白のお餅が定番で、何処の家も同じものを食べることになる。小学校の昼食はまだ白米に麦が混じる弁当だったが、祭の時期だけは真っ白なご飯とご馳走の残りがギューギュー詰められていた。明順の母親もアルミ缶の煎餅がよく売れて、帰りは祭用の蒲鉾やお餅をどっさり貰って行く。明順の弁当箱も豊かな彩になった。

お返しにお酒を貰うことがある。三軒の小屋では床下にどぶろくを仕込んでるのである。密造酒である。村人はお酒が足りなくなると秘かに買いに行っていたのだ。運悪く税務署あるいは警察に見つかると、どぶろくの壺を土手に集めてぶち撒かれるそうだ。空っぽの壺がいくつも土手に並んだと話すのを聞いて、その光景を見たかと思つた美鈴だった。いくつ壺があるのか知らないが、これがまたすぐに作られて元の木阿弥となるのだった。「朝鮮人は筋金入りだ」母はそう言つて苦笑していた。

「杵屋さんの夜祭に明順さんで行つてえかね？」「そげん、おばさんが良いと言えは・・・」

美鈴は小躍りして土手から明順を呼んだ。「弟や妹置いて行かれない」明順は答えた。美鈴も弟妹

までは面倒見切れない。もう一度母親に頼んでみると言つて、明順は引き返した。そして笑顔で戻つて来た。夕飯を終えて池の横で待ち合わせた二人は神社に向かい、裸電球の灯りを見つけてホツとした。ちようど賑やかなお囃子の最中に間に合った。境内は大勢の村人が、今から始まる出雲神楽の舞台を見つめていた。盛り土のしてある場所を確保して周囲を見ると、目立つのかびつくりした顔を向けられた。

しばらくして、篠笛と鼓の音が森に吸い込まれるように響いた。白装束に白い能面の「天つ神」が静々と神楽殿に現れた。単調な舞いがひとしきり続いた後、やにわに音が強くなり鉦と太鼓も加わり、袖から須佐之男命とどろろを巻いた八岐大蛇が登場した。

大蛇退治のひと幕に興奮した。剣を振りかざした須佐之男命に巻き付いた大蛇が、口から火を吹き上げ締め付けていく。やがて命の剣が振り落とされて、大蛇が力尽きるとやんやの喝采が起きた。

天つ神は隅っこで微動だにしない。そのつるりとした表情が、裸電球に照らされて無気味に光っていた。神と大蛇の争いに見入っていた美鈴は、ふと横の明順を見た。その青白い顔は、あの無表情の能面と同じだった。鳥肌が立つほど美しく怖く映った。

どこかで見たことがある・・・お雛さまだ。
美鈴の家のお雛様は、美鈴の為に詠えた新品では無く、先祖代々飾って来たもののお古だった。塑像のように粘土を捏ねて型取りし、表面を白く塗った大きな人形だった。

蔵から出し入れするうちに、頬も手も身体も削げてみずぼらしくなっていたが、月遅れの四月三日には表の間に段飾りされてきた。部屋が薄暗くなると、人形の糸のような目に睨まれて部屋に入るのが怖かった。明順の目はあの雛とそっくりだった。

「こわい踊りだね」「初めて見たかね、蛇の中は隣のおっちゃんが入っちゃったよ」

「蛇の中から顔出して、たばこ吸ってたね、汗だらけだった」

「毎年神楽やーけん、また来年も見にいかやね」

明順は有名な安来節も知っていた。ドジョウ掬いの踊りが踊りが面白いと笑った。家では三軒の家族が集まって踊ることがあると言った。国の衣装に着替えて一晩中踊りあかすそうだ。

「朝鮮の衣装ってどげな?」「ここにながーいリボンが付いてて、スカートがパーツと広がるよ。チョゴリとチマだよ」

冬が近づいていた。

「池を回ってみようか」明順が言い出した。

「えがねー、お茶とお八つも持って行くだが」「お弁当も持って行くこう」

「ほんなら、朝は墓参りがあるけん人が来るが。ちよんぼし手伝って昼前に行くが」

青空のその日、親戚と方丈さんと共に墓参りを済ませ、急いで弁当を詰めて用意した。母親が胡散臭げに顔を向けたが、夕方帰るからと飛び出した。

土手に行くともう明順が待っていた。管理人棟の前を通り過ぎた。おじさんが畑を鍬で均しながら、何処に行くかと聞いてきた。

「池に遠足です」

「そう、奥は道が狭くて危ないよ。陽も短いから細くなったら引き返しなさい」

池の奥など知らない二人は、元気に返事して歩きだした。オシドリやカモが泳ぐ滑らかな波の跡を見ながら、赤土の土手を廻り始めた。バレーボールをしている美鈴は、中学校でも続けようと思っていた。明順にも薦めたが、運動は苦手と笑った。

中学校は宍道湖の景観に恵まれているが、学校を初めて建設する時は、家の兄や兄嫁たち一期生が、総出で建

明順は胸に手を当てて、リボンを結ぶ仕草をした。母親のことをオモニ、父親はアボジと呼ぶことも教えてくれた。一緒に祭に行つて良かったと、美鈴は嬉しい気持ちで帰宅した。

神話の起源を知らなくとも、村人は出雲の神様が災いから守ってくれると固く信じていた。十一月末には、一年で最も大事な「佐太神社のお忌みさん」がある。全国の神様が佐太神社に集い、縁組を相談する時期は、歌舞音曲を慎む謂れから「お忌みさん」になったそうだ。

正月よりも念入りにお祓いをし、家族と一緒に徒歩でお詣りした。元旦のお年玉は無く、お忌みさんに小遣いを弾んでくれるので、子どもたちはお年玉はお忌みさんに貰うものだと思っていた。明順の弟妹にあげるモールは、女の子がこの夜店で買つて大事に遊んでいたものだ。

「美保関神社」へも連れて行かれた。米子から堺港の魚市場にも連れて行かれた。その突端から見ると遠くに島が見える。あれは隠岐の島でその向こうが朝鮮半島だと教えられたのを覚えている。外国など見当もつかない美鈴には、明順が遠い存在に思えた。

設補助したと聞いている。校庭の瓦礫を除けて均し、屋根瓦運びも瓦の裏に各自の名前を刻んでリレーで積み上げたそうだ。

校庭からは直に宍道湖に入ることが出来て、汽水湖の水辺は遠浅でつかいシジミが透けて見えた。ひと仕事が終わると、兄たちはシジミを掬つて家にお土産に持って帰った。

「お私たちの汗が沁み込んでるけん」そう言う兄の誇らしそうな顔を思い出し、何期目かの後輩になれるのが嬉しかった。

そんな話を明順はにこにこ聞いていたが、どこなく元気が無かった。途中で弁当を広げた。客があった美鈴の弁当はおかずが賑やかだった。明順のアルミの弁当箱の蓋に卵や蒲鉾を入れて黙って池を眺めて食べた。

沈黙に耐えられず、思い切つて口火をきつた。

「ねえ、明順さんはなんで朝鮮から来たかね。苗字が山本で名前が明順かね。死んだお父さんが日本人かね?」

口をもぐもぐさせていた明順の動きが止まった。美鈴を凝視すると目からみるみる涙が溢れ出した。もう我慢が出来ないというように、アーンと大声で泣き出した。「ゴメン、いけんこと言つたらだか!」明順が泣き止まないの、今度は美鈴は悲しくて俯いて泣いた。先に明

順が涙をぬぐうと意を決したように告げた。
「アボジもハラボジ（お爺さん）も、日本で働いて死んだ。戦争が悪いとオモニが言った」
「日本はひどい国だと、オモニは泣いている」
せんそう、日本はひどい国・・・美鈴が意味を知るのは幼すぎた。

空回りする言葉に、もしかしたら村人が接する態度がそうなのかと、ぼんやり思うのみだった。明順が誘ったのはこれを言う為だったのかは分からない。溜めて来た澱が美鈴の前で爆発したのかも知れない。

しばらくして明順は呆然とする美鈴に構わず、「学校に行けて良かった。おもしろかった」と言い、再び弁当を食べ休憩を終えた。

空はまだほんのり見えるが道幅が狭くなり、管理人の注意を思い出した。迷った後もう少し先まで行くことにした。よそ見していると池に落ちてしまいそうになる。赤土の岸は水に濡れて滑りやすくなっている。

つるべ落としの夕暮れが迫り、あつという間に暗くなってきた。足が竦んだ美鈴に代わり、明順が先に進もうとしたが、真つ暗で入れ違いも出来ない。引き返すことに決めて、崖にびったり身体を寄せて一歩づつ慎重に足を出した。

やがて遠くの灯りが目に入り、カンテラをグルグル回しているのが見えた。心配そうに迎えたおじさんを見て、やっとホツとした二人だった。

「無茶するんじゃないよ、おうちの人が心配してるから、早く帰りなさい」「こめんなさい」

美鈴はこれから真つ暗な道を帰らなければならない。とんだ遠足になった。その時明順が家に寄るように言う。懐中電灯を貸してあげると言う。強引に美鈴を連れて行き小屋に入った。

家には行つてはいけけないと言う母の声が一瞬聴こえて遠のいた。電球がぶら下がる炉辺は、鍋から湯気が立って暖かかった。明順の母親は呆れた顔つきで二人を見比べていた。壁に架かっている古時計は五時半を指していた。大変だ、大変だと呟きながら、提灯と懐中電灯を持って美鈴をせかすと村の入り口まで付いてきてくれた。明順と弟妹が土手まで見送った。

「こんなこと、もうやるじゃないよ」

別れる時、オモニはそう言つて美鈴の手を強く握つた。
「あの子と遊んでくれてありがとう」

オモニの姿が消えるのも待ちきれず、美鈴は家に飛び込んだ。母親には怖い形相で叱られて、最後にとどめを刺された。

「もう行くだねけん！」

その夜美鈴の頭の中は、せんそう、日本はひどい国の文字がグルグル回つて寝付けなかった。まだ冬休みも春休みもある。そしたらもう一度二人で貯水池を歩いて、道と明順の想いの続きを知りたいと思った。一周したら一緒に中学校へ行くのだと決心していた。

冬の間は厳しい山間地方の寒さに閉じ込められ、家中で縄をなう仕事を手伝った。土間で木槌で叩いて柔らかくしたワラを水で湿らせ、足の親指と人差し指の間に挟み、縄にするのだ。手だけで無く足まであかぎれが出来て痛くなった。

小学校の卒業式に、明順と母親は目も鮮やかなチマチヨゴリ姿で出席した。日頃話していた家族で着替えて踊り明かす衣装がこれなのだ、目を見張った。晴れやかな顔で卒業した母娘は、春休み以後は、パツタリ姿を見なくなつた。

土手に行くとな人の気配が無く、庭にいた沢山の鶏もいなくなつていた。またどこかへ働きに行ったのだろうか。

明順が姿を見せなくなつたのは、これが二度目だった。母親はもう戻つて来ないだろうと言つた。その頃国

へ帰還する運動が盛んになり、新潟港から船が出ているということだった。親たちも本当のところは分かつていなかったのだろう。

「そぎゃんこと、聞いちよらんけん。明順さんは中学へ行きなーけん」

「決まったことだけん、今は長崎に集まっちゃなつて話したが、やくてもねが（バカバカしい）、これでばくとすーけんね（ホツトする）」

「お母さんはそげなことばつか言つて！ だらくそだけん（最低だ）！」

本当にあの地平線の向こうに行つたのだろうか、朝鮮の中学校で学ぶのだろうか。貯水池に誘つたのは、別れを言う代わりだったのか。それとも日本人の美鈴に、悔しい想いをぶつけたかったのか。

もう一度池を一周しようと告げる相手を、失つてしまった。

その後も美鈴は、氏神さんへのお詣りの行き帰りに何度も土手を通つた。そのたびに、小屋は風雨に晒されてみすばらしくなつていった。